

編集デスク <8>

秋田市広小路に三浦書店という本屋さんがある。医学書院の特約店であるから、この地方にはおなじみの方も多いと思う。支配人佐瀬力さんは、まだ26歳という若年であり、この道に入ってまだ年数は少ないのだが、その商売熱心には感心させられる。

この間編集部員が東北に出張して取材をし、かつ全面改訂をした「看護学教科書」や「高等看護学講座」について説明会を開いたりした。その際三浦書店に立寄ったのだが、その積極的な仕事ぶりにほとほと感心して帰京した。だいたい医学書院では、開業のドクターは本をあまり読まないという結論を出している。開業は重労働であり、実際問題として勉強するひまがなかりうし、また病院の勤務医におけるような研究会・抄読会や学会や集談会の刺激がないから、しぜんと本を読むことから遠ざかる傾向にあると見ているのである。これに反して、病院の勤務医は、収入こそ少ないかもしれないが、

周囲の雰囲気から、勉強しないと脱落するから、なけなしの金をはたいても本を買い勉強せざるを得ない。自分で本を買わないまでも、医局には本を備えつづけることを勤務の条件としても求めることになる。医学書院ではそのように見ているのである。これは、人情の機微にふれた現実論であり、かつ統計的にもそのことが裏書きされている。したがって開業のドクターに本格的な医書を購読させることは、なかなかむづかしいのである。

開業医に売った

Bergmann 40 余万円

長谷川 泉

ところで、三浦書店の場合であるが、医書の中でも高価をもって聞かえている Bergmann の Handbuch der inneren Medizin の全9巻40余万を開業のドクターに買って貰っている。それは1例に過ぎず、10万のけたをもって数える洋書をやはり開業のドクターに売り込んでいるのである。これは、医学書院的な常識を打破したもので、並々ならぬ苦労があったと思われる。聞くところによると、この Bergmann の売込み

のために市内の病院ばかりでなく開業医40人をくまなく訪問したという。前言に基づくならば、売りにくい開業医に Bergmann を売り込むぐらいだから、売りよいところにはさらに倍する成績をあげているであろう。そのことは、これは一般書の場合であるが、目下全書もののブームを起している平凡社の「国民百科全書」の獲得数は全国随一であろうと自信のほどを示しているのでも知られる。

書店であれば、多く販売して成績をあげるのが第一義である。出版社であれば、よい本を出版して、すぐれた文化財を作り、これを基礎にしてさらによい本を出してゆくのが第一義である。人のおおの歩む道が違うから、それぞれの生き方に翻訳して考えなければならないのだが、私はたまたま耳にした三浦書店の例をとって、もって他山の石として、わが道に対する反省とするのである。ナースにとっては、教養を磨き、看護技術を向上させてよいナースになることが第一義であるのはいうまでもない。そのためには、勉強をしなければならない。本を熱心に読まなければならない。

表するほどのことでもないと考えたよりも、対外的に抄読会の歩みをたえず公表することによって、会員としての自覚と責任を自分自身にたしかめさせる効果的な方法と考えるべきであろう。

読書会の人員はもちろんそのおこなう方法によって異なってくる。ゼミナール方式ならば5～6名が適当であろうし、輪読会式では12名内外、発表会式のばあいでもせいぜい12、3名が限度であろう。人員が増大するということは、当然発表の回数が少なくなり、意見や質疑の交換が制限され、全体的に参加の密度がうすくなる。したがって抄読会は参加者の人数の規模によって、その盛大さを競う性質のものではないのである。着実にその成果をつみかさねていくまじめさが貴いのである。

IV. 抄読会のすすめ

読書は究極的に個人のものであることはすでにのべた。しかし個人の読書は発展していかなければならない。読書が発展していくということはけ

って孤立して達成されるものではなく、人間の全体的な行動様式の一部として成長するものである。つまり、読書力とはひとつの発展的概念であって、一定の知識・技術習得の段階をいうのではなく、自主的な自己規制の能力、するどい社会的責任の意識、集団と時代に適応する能力などの総合的基盤のうえにたち、定着した知識の利用のしかたを生長させていく能力をいうのである。定着した知識、つまり主として印刷メディアは、

1) 現在利用できるもっとも輝かしい、そして多種多様な人間経験を提供してくれ、2) 利用者の都合とペースに応じて、検討したり、くりかえし学習したりすることができ、そのためにより明確な理解を可能にし、また合理的態度を生み、健全な結論に達することができるという特性をもっている。抄読会は、印刷メディアの利用を中心とした個人の読書を、集団のダイナミックスによって全人的発達の一環として成長させていく大きな力となるものである。

(筆者・東京大学助教授)